

2006年5月26日

日本郵政株式会社
代表取締役社長 西川善文 殿

DOCOMOMO Japan 代表
鈴木 博之

東京中央郵便局庁舎保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認めその保存を訴えることを目的のひとつとする国際的な非政府組織の日本支部です。別添資料にありますように、貴公社の東京中央郵便局庁舎を、日本近代の重要な建築遺産のひとつと認識し、本支部が2003年に選定した「DOCOMOMO Japan 100選」のひとつにあげさせていただいております。当該建物の存続が危ぶまれる旨の新聞報道を受けて、同建物の保存を要望いたします。

ご承知のように、東京中央郵便局庁舎は、1931（昭和6）年に大倉土木株式会社（現・大成建設）の施工で建設されたもので、鉄骨鉄筋コンクリート造地上5階地下1階建てで、その敷地が東京駅前の1ブロックを占める、当時としては大建築（延床面積36,637.1㎡）でした。設計は、逓信省経理局営繕課の吉田鉄郎です。この建物は竣工の1年半後に来日したブルーノ・タウト（1880-1938）が日本の新建築の最高峰として絶賛したことに示されるように、戦前の日本の近代建築の代表例として、近代建築史上著名なものです。

この建物の歴史的・建築的価値は下記の3点に認められます。

1) 戦前の日本の近代建築の代表例であること

東京中央郵便局庁舎は、窓口業務・郵便集配業務・オフィスという機能に対応するための施設として計画されました。敷地はほぼ台形状で、そのブロック全体を占めることになるので、すべての立面が眺められる対象になり、そこに首都の「中央郵便局」としての威厳をどう表現するか、そして外観と機能との対応をどうするかが、設計の重要なポイントだったと考えられます。これは解決がかなりむずかしい設計課題といえます。

それに対して吉田鉄郎は、駅前広場と丸の内のオフィス街側をこの建物の主立面として扱い、そちら側に5階建ての壁面をまわしました。そして、その長大な立面の各辺ごとに対称性を意識したまとまりをつくることによって立面全体に統一感と変化を与え、冗長に陥るのを巧みに避けています。たとえば広場側（北側立面）の中央に主玄関を設け、その上に時計を配して、その軸を中心としてその両側に同じ幅の窓を4つずつ並べ、その両端に幅の狭い窓を1つ配する（それによってその窓の両側に少し幅広の壁がついてこの北側立面にひとつのまとまりが感じられる）というようなやり方です。また、4階と5階の間の外壁に胴蛇腹を通すとともに、窓の高さを上階にいくほど低くして、立面を引き締めています。しかも、その窓の高さの違いはその後ろの室の機能にも対応しています（たとえば、1階の窓口（旧・公衆溜）のスペースの天井は高いことが必要で、5

階の吏員宿直スペースの天井は低くてよい、ということです。外壁には装飾はなく、柱型やスチール・サッシュの割り付けでアクセントがつけられているだけです。ひじょうにシンプルなやり方ですが、それでいて威厳を表現し得ています。また、柱型が威厳を表現するための手法だったことは、駅前広場とは反対側（南側）の集配口の立面にはそれが見られないことからもうかがえます。このように、複雑な平面形の、大きな建物ではありますが、細部にまで神経が行き届き、二丁掛けタイルを基本モジュールにした立面のディテールにも破綻が見られません。

このようなやり方はそれまでの日本の建築には見られず、ブルーノ・タウトが絶賛したのも、また当時の日本の近代建築家たちがこぞって賞賛したのも当然といえましょう。その後も日本の近代建築史では必ず言及される、重要な建築遺産になっています。

また、改装されているとはいえ、内装にも各所に当初の面影が残っています。たとえば、窓口業務を行う場所の柱などは、シンプルさを標榜した当初のデザイン・コンセプトを保っています。

2) 日本近代の有名な建築家・吉田鉄郎の代表作であること

吉田鉄郎（1894-1956）は、東京帝国大学建築学科を1919年に卒業し、直ちに逓信省営繕課に勤務しました。その優れたデザイン・センスと誠実な人柄に率いられた逓信省営繕課は黄金時代を迎え、日本の近代を代表する優れた建築を数多く世に送り出しました。その学識も生前から高く評価され、日本の建築や庭園に深い造詣を持っていたことが知られています。ドイツ語に堪能だったことを生かし、“Das Japanische Wohnhaus”（1935）や“Japanesche Architektur”（1952）、“Der Japanische Garten”（1957）を、いずれもドイツのヴァスマート社から出版して日本文化を紹介し、海外から高い評価を得ています。東京中央郵便局庁舎は、その吉田の作品の中でも、大阪中央郵便局庁舎（1939）と並び称される、郵便局建築の最高傑作として日本の建築界で高い評価を得てきました。

3) 東京駅前の景観を構成する重要な建物であること

東京中央郵便局庁舎は、東京駅丸の内駅舎の南隣に位置し、同駅前の景観を構成する重要な要素として親しまれてきました。首都・東京の玄関口を飾ることを意識してつくられたもので、東京駅とは別の、上記のような近代的な手法でそれに応えたことは、都市建築の好例として注目すべきものです。

また、丸の内では戦前の建物が数少なくなっており、東京駅丸の内駅舎と隣り合って建つ東京中央郵便局庁舎は、東京駅前の戦前からの景観を維持する建物としても貴重なものです。

以上のことから、当該建物は、文化的意義と歴史的価値を有する貴重な遺産と考えられます。日本近代を代表する、このかけがえのない建築遺産が後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。もし求められれば、本会は、この建物の保存・活用の際して、建築の専門家という立場から、助言をさせていただく所存であることを申し添えます。

敬具

2006年5月26日

日本郵政株式会社
代表取締役社長 西川善文 殿

DOCOMOMO Japan 代表
鈴木 博之

大阪中央郵便局庁舎保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認めその保存を訴えることを目的のひとつとする国際的な非政府組織の日本支部です。別添資料にありますように、貴社の東京中央郵便局庁舎を、日本近代の重要な建築遺産のひとつと認識し、本支部が2003年に選定した「DOCOMOMO Japan 100選」のひとつにあげさせていただいております。当該建物の存続が危ぶまれる旨の新聞報道を受けて、同建物の保存を要望いたします。

ご承知のように、大阪中央郵便局庁舎は、1939（昭和14）年に、逓信省経理局営繕課の設計、清水組（現・清水建設）の施工で建設されたもので、鉄骨鉄筋コンクリート造地上7階地下1階建てで、その敷地が大阪駅前の1ブロックを占める、当時としては大建築（延床面積25,565㎡）でした。設計は、逓信省経理局営繕課の吉田鉄郎です。この建物は、戦前の日本の近代（主義）建築の代表例であり、戦前のモダンなデザインの到達点として、近代建築史上著名なものです。

この建物の歴史的・建築的価値は下記の3点に認められます。

1) 戦前の日本の近代建築の代表例であること

大阪中央郵便局庁舎は、東京中央郵便局庁舎と同様に、窓口業務・郵便集配業務・オフィスという機能に対応するための施設として計画されました。敷地はほぼ長方形で、東京のものよりも整った形状なので、それをそのまま生かして、広場側に寄せて長方形平面の庁舎を建て、その反対側を郵便物発送用のスペースにしています。

東京のものと同じく、広場側に5層の壁をまわし、そちら側に公衆室と窓口業務や、オフィス機能を配し、後ろ側に現業スペースを配しています。機能の配置の仕方や広場への対応は東京のものと同様で、それに対応して、窓の高さ（天井高）を上階に行くほど小さくしているのも同じです。しかし、大阪においては、立面のデザインがよりシンプルに、より洗練されていることが注目されます。これは敷地が整形であることにも関係しますが、北東（広場）側と南東側のL字型の5層の立面を、柱型と窓、窓台、庇という、建築に必須の要素だけで構成し、非常にシンプルでありながら、威厳が感じられる立面を実現しました。柱型や窓サッシの垂直線と、窓台や庇による水平線だけで構成された立面は必要条件をみたただけに見えますが、その出（それが立面に投影される影を含めて）やタイルの目地の線との整合性を含めて、周到的配慮が払われ、細部にまで神経の行き届いたデザインになっています。それは庇とテラスの処理の仕方のちが

いにも見られます。テラスは上面を平にする必要があるのですが、そのキャンティレバーを下方を壁に近づくにしがって太くしてあるのは当然ですが、庇においては、太くするのを庇の上に逆梁状にし、下からの見栄えをより軽快に見えるように工夫しています。また、屋上の塔屋足元(6階)の壁をガラスのカーテンウォールにするなど、当時としては最新のデザインも見られます。

なお、外装にはグレーのタイルが張られておりますが、これは設計者の弁によれば、大阪の煤煙による汚れを目立たなくするためとされています。

2) 日本近代の有名な建築家・吉田鉄郎の代表作であること

吉田鉄郎(1894-1956)は、東京帝国大学建築学科を1919年に卒業し、直ちに逓信省営繕課に勤務しました。その優れたデザイン・センスと誠実な人柄に率いられた逓信省営繕課は黄金時代を迎え、日本の近代を代表する優れた建築を数多く世に送り出しました。その学識も生前から高く評価され、日本の建築や庭園に深い造詣を持っていたことが知られています。ドイツ語に堪能だったことを生かし、“Das Japanische Wohnhaus”(1935)や“Japanesche Architektur”(1952)、“Der Japanische Garten”(1957)を、いずれもドイツのヴァスマート社から出版して日本文化を紹介し、海外から高い評価を得ています。大阪中央郵便局庁舎は、その吉田の作品の中でも、東京中央郵便局庁舎(1939)と並び称される、郵便局建築の最高傑作として日本の建築界で高い評価を得てきました。

ちなみに、大阪中央郵便局の立面の主要モチーフである柱型は、日本の建築的伝統への造詣が深かった吉田の伝統理解を示すものという見方もあります。

3) 大阪駅前の景観を構成する重要な建物であること

大阪中央郵便局庁舎は、大阪駅の南西隣に位置し、同駅の反対側に建つ阪急ビルディング(竹中工務店・阿部事務所、第1期/1929、第2期/1936)とともに、同駅前の景観を構成する重要な要素として親しまれてきました。商都・大阪の玄関口を飾ることを意識してつくられたもので、東京中央郵便局よりさらに近代化した手法でそれに応えたことは、都市建築の好例として注目すべきものです。

また、梅田の駅前では戦前の建物が数少なくなってきたおり、大阪中央郵便局庁舎は、大阪駅前の戦前からの景観を維持する建物としても貴重なものです。

以上のことから、当該建物は、文化的意義と歴史的価値を有する貴重な遺産と考えられます。日本近代を代表する、このかけがえのない建築遺産が後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。もし求められれば、本会は、この建物の保存・活用之际して、建築の専門家という立場から、助言をさせていただく所存であることを申し添えます。

敬具